

『百花控帖』十句抄

花薄 巨石は神となりにけり

男郎花鑄びて匂へる父の鉦

南蛮煙管を誰にも言へぬ日暮かな

菜の花に身体明るくして戻る

ゆゑなしに悲しき胸や翁草

出征の日の父麦の花一列

薔薇を愛す力石徹のごとく痩せ

振花の日ごと日暮を惜しみけり

十一人ゐて夏萩に風止まず

夏椿薄明薄暮を姉とゐる

花という装置の不思議を改めて思う。地球は水の星と言われるが、また花の星であろう。喪失を癒やす花がなかったら、地球はどんなに淋しい星になっていただろう。

(「あとがき」より)